

[成果情報名]長崎県型高設栽培におけるイチゴ「ゆめのか」の栽植密度と収量性

[要約]イチゴ「ゆめのか」の高設栽培では15cmまで株間を狭くすることにより、年内収量は増加するが、1果重が小さくなり、頂花房、腋花房ともに収穫開始が遅れる。30cmでは収量が低下するため、20cm～25cmの株間が妥当である。

[キーワード]イチゴ、ゆめのか、高設栽培、栽植密度

[担当]長崎県農林技術開発センター・農産園芸研究部門・野菜研究室

[連絡先](代表) 0957-26-3330

[区分]野菜

[分類]普及

[作成年度]2015年度

[背景・ねらい]

本県では農家所得の向上を目的に、イチゴの主力品種である「さちのか」から、多収で輸送性に優れる「ゆめのか」への転換を図っている。その中で農林技術開発センターでは早期出荷と多収生産を実現するため、暗黒低温処理による早進化技術の開発を進めてきた。これにより「ゆめのか」の導入が進み、「さちのか」より100万円/10a程度、販売額が向上している。

一方で「ゆめのか」は愛知県で育成された品種であり、西南暖地における栽培技術に関する知見がない。今後の更なる普及拡大には品種の特性を活かした安定生産技術の開発が必要であり、本県の環境条件に応じた栽培技術の構築が必要となる。

そこで栽培の基礎となる指標の策定に向け、ここでは高設栽培における「ゆめのか」に適した栽植密度(株間)を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. イチゴ「ゆめのか」の高設栽培における株間は15cmで年内収量が多くなり、1月以降の収量は20cm、25cmで15cmと同等となり、30cmでは年内収量、総収量とも少なくなる。1果重は30cmが最も大きく、15cmは最も小さくなる(図1)。
2. 25cm以上の株間では頂花房の収穫開始が早く、頂花房と第1次腋花房間葉数も少なくなり、第1次腋花房の収穫開始が早くなる(表1)。
3. 株間の違いによって障害果の発生率には明確な影響は認められない(表2)。

[成果の活用面・留意点]

1. 「ゆめのか」の高設栽培における栽植密度の指標として活用できる。
2. 本試験は、年内の芽数を1芽管理し、花房当たり12～15果/株を目安に着果制限した結果である。株間と収量には芽数及び着果数が関与していることが考えられ、次年度以降に検討する。
3. 2013年は第1次腋果房の収穫開始が遅れ、収穫の中休みが顕著に現れた年の結果である。

[具体的データ]

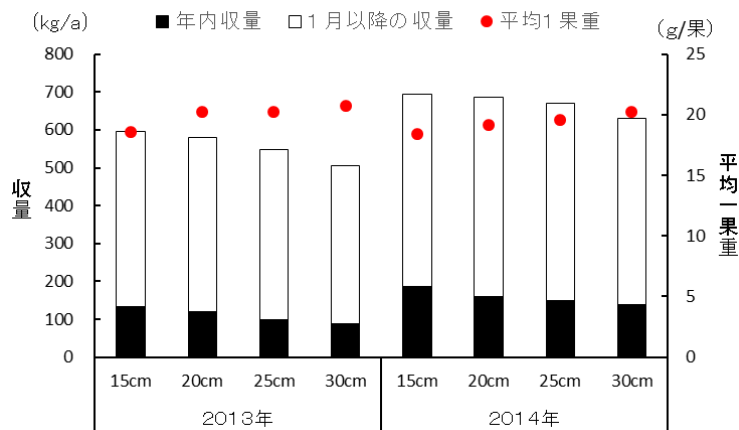


図1 「ゆめのか」の高設栽培における株間と収量及び平均1果重

表1 「ゆめのか」の高設栽培における株間と花房収穫開始日及び花房間葉数

	株間	栽植株数		頂花房 収穫開始日	頂～第1次 腋花房間葉数	第1次腋花房 収穫開始日
		(株/a)	比率(%)			
2013年	15cm	933	133	11/24±4	5.5 a	3/12±3
	20cm	700	100	11/23±4	5.7 a	3/9 ±2
	25cm	560	80	11/18±2	5.0 ab	3/3 ±2
	30cm	467	67	11/20±3	4.6 b	2/26±2
2014年	15cm	933	133	11/23±5	5.3 a	2/16±5
	20cm	700	100	11/23±6	4.9 ab	2/11±3
	25cm	560	80	11/15±3	4.5 bc	2/2 ±3
	30cm	467	67	11/14±1	4.3 c	1/30±2

※栽植株数の比率は株間 20cm を 100 とした場合の比率

Tukey 法により同年、同列の異なる英文字間に 5%水準で有意差あり、±は 95%信頼区間の幅

表2 「ゆめのか」の高設栽培における株間と障害果の発生率

	株間	先青+先白 果率(%)	不受精果率 (%)	裂皮果率 (%)
2013年	15cm	2.8	3.0	2.4
	20cm	4.9	3.5	0.8
	25cm	2.7	3.2	0.5
	30cm	3.7	3.1	0.5
2014年	15cm	4.8	4.9	0.2
	20cm	7.5	3.2	0.2
	25cm	6.3	3.2	1.4
	30cm	6.1	4.1	0.4

○耕種概要

育苗：高設雨除け育苗

施肥量 N-200mg/株

本圃：長崎県型高設栽培

施肥量 N-16.6kg/10a

定植日：2013年9月12日

2014年9月10日

定植株：暗黒低温処理株

収穫終了日：2014年5月14日

2015年5月15日

[その他]

研究課題名：イチゴ次期有望品種「ゆめのか」の安定生産技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2013～2015年度

研究担当者：前田 衡